

COLORAMA

L'ENCICLOPEDIA TUTTA A COLORI

鄧平如書

COLORAMA

L'ENCICLOPEDIA TUTTA A COLORI

21世紀
世界百科
カラマ

3

主婦と生活社

監 修

上智大学名誉教授

小林 珍雄

早稲田大学教授

坂崎 乙郎

日本イタリア京都会館理事長

聖心女子大学教授

京都大学名誉教授

野上 素一

日本育英会会長

前 東京大学総長

林 健太郎

(56名題)

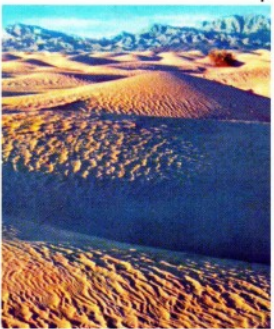


© Arnoldo Mondadori Editore - Milano 1970
Originally Published in Italy under the title 'COLORAMA',
Published in Japan 1979
by Shufu - to - Seikatsu - Sha Co., Ltd., Tokyo.
Japanese translation rights
arranged with Arnoldo Mondadori Editore - Milano
through Tuttle - Mori Agency, Inc., Tokyo.
Credit lines and original publications
of the photographs and materials
used in these books are listed
on the 4th page of the supplement
found at the end of the 10th volume.

けんじは、東晋である。中国、河南（今の河南省）の城陽郡の城陽郷に岡園村に中に分佈してある一団の墳墓。1502～1550年の3世紀にわたる格別な発掘調査による。発掘時代後期の墳墓であることがほぼ明らかになった。墳墓の東西約1.54口の縦長形の墓は、すべてに盗掘によって壊れていて、そのうち50基の小墓からには発掘された遺物のほかに、土器、銅器、馬具などの副葬品、車馬具、うまの骨、それらにともなう出土した土器、銅器、馬具の約3口の岡園村で発見された3基の大型には、建物の跡が残っており、いずれもこれに本葬もしくは副葬がなされている。内部に敷きわたっていた、北辺の中央、墓から車具、馬具、土器、銅器（馬具）類、土器のほかに金貨類の零貨（たしかにうま）が出土した。発掘調査以前に比べて、この墳墓の性格がはっきりした。土葬となっており、史実美術的価値が高いものである。また、埋土もともに、

きこう 気孔 高等植物の表皮にある微小な孔。気孔は孔組織と呼ばれる2つの半月形の細胞のあいだにできた隙間であり、主として葉の裏面に多く存在する。この孔を通して、外気と体内組織とのガス交換がおこなわれる。気孔は、細胞の膨張収縮、温度、光量などに応じて開閉し、植物の呼吸、蒸散作用、薬散作用を調節する。気孔によく似た組織に水孔があり、主として、葉の先端や側端から過剰な水分を排出する。

きこう 一 (写真・書目)



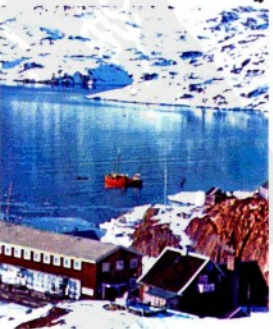
きこう 気候 ある地域における、長期間の気温や降水などの気象現象を平均化した平均状態。一般に、気象が大気の状態や大気中の普遍的な観現象をさすのに対し、気候は、土地、人間生活、気候と密接に結びついており、幅広く意味するものも多い。気候を決定づける要素としては、気温、風、降水のことも多いがそれらよりも重要であり、ほかに湿度、日照、霜、雪量、蒸発なども考えられる。地球上の気候は、気候要素の変化によって、さまざまな気候的特色を示し、海洋性気候や大陸性気候などの気

この「日記」は、元禄13年に記述。見聞録・紀行と重視した書種、随筆・雑記を含む、種々の形式を有す。文字遣いを重視したもののなかに「文」と呼ぶが、その用法に地誌的、民族学的な見地から考へられたものもある。13世紀に、イタリアカトリック宣教師が旅したカマリアーノ、同じく北イタリアへまで到達した14世紀のマルコ・ポーロの訪東記と全く合致する報告書や旅行記は、ヨーロッパの東洋学への関心をもたらした。マルコ・ポーロの「東方見聞録」などとともに、航海術の発達や新大陸の発見の一要素となった。しかし、十分な学識や知識をもった異文化の文化に詳しい知識人としては、筆者の語彙や内容があまりよく書かれていた。ヨーロッパから輸出された、日本の旅行記としては、ザビエルが1549年文部院にもて書かれた書簡類が有名である。いっぽう、文芸的要素をもった書かたに旅行文や日記は、モンテニョーの「旅日記」(1774)、ゲーテの「イタリア日記」(1817)、チャールズの「マリニオン」(193)、ジードの「つばき日記」(1927)など、それぞれ異なる表現の文壇への好奇心にとまらない。筆者の内面での表裏の両面を述べたものが多い。日本では、紀貫之の「土佐日記」、松尾芭蕉の「奥の細道」などがなる。

きごう 記号 記号とは、ある一定の規準、条件のもとでおこなわれる指示によって機能し伝達されるもの、および意味内容をもつ文字、符号、音などの総称。記号には、単純かつ基本的に直接感知しうる記号〈シグナル〉と、シグナルを提出する解釈者が、類推によってそれと同義の他の記号に代用される象徴〈シンボル〉とがある。

こうきやく 気象学 一定期間を周期とする気象現象と気候とをいふ。この方法に依り、解するを気学。その研究の方法上、気候現象を静的にとらえる古典気候学と、動的にとらえる近代気候学とに大別される。気候学の歴史は古く、その起源はバビロニア時代までさかのぼることができるが、長期にわたる観測をもとにした学問として成立したのは19世紀中葉である。このころから活躍した気候学者としては、地球の温暖帯をはめてみたドットツのモデルと、楕円のモデルをいふ。とくに、ケッペンが1918年に発表した、世界の気候帯を考慮して地球の気候を11帯に区分する説は、明瞭で容易に理解できることから、今日でもなお教科書などに広く用いられている。最近の気候学は、人工衛星と観測手段に用いるものとして、地上観測の困難な極地方や大洋の気候研究を進めている。

こうじゆんか 気候環境 生物が生まれつゝた気候の土地へ移したとき、その土地の環境に適して生理的性質や形態的特性を变化させる現象。農業的、あるいは植林を移したとき、その土地に適して開花が早くなるような例が特に多くあり、その性質は遺伝的に獲得されると思ふられる場合もある。しかし、すべての気候環境化が遺伝的に説明されるかどうかは明白でない。人間では生理的特質として、人種や民族によつて気候に合ったような適応がみられる。一般に大陸性気候の土地を地とすると、人種や民族は気力強弱といわれ、世界中にくろく出てゐる中国人はその事例とされる。白色人種は



類型)、熱帯や温帯などの(気候帯)、ツンドラ気候のような(気候区)に区分することができ、現在、ほとんど一概に用いられている気候区分は、ドイツのケッペルが植生分布をもとに考案した目の気候区分で、これは、地の降地を樹木気候と無樹木気候に分け、前者を熱帯、温帯、冷帯、後者を乾地、極寒と区別し、さらにそれぞれを細分化したものである。すなわち、家緑の分布にあおられた(熱帯雨林気候)(気候区)と(ツングラニアの森林)、山岳にみられる明瞭な(熱帯サバナ気候)、降水量不足に

樹木が生育しない(草原気候)、乾燥がいちじるしい(砂漠気候)に写真❶砂漠風によって形成された砂丘、温暖多雨の(温暖湿潤気候)、温暖で夏季に雨の多い(亜湿夏雨気候)、地中海気候と知られる(温暖夏雨気候)に写真❷イタリアのオリーブ、寒帯多雨な(冷温湿潤気候)に写真❸カナダのポプラ林、冬に乾季のある(冷帯夏雨気候)、気温すぎて樹木が生育しないツンドラ気候(写真❹グリーンランド)、および極地にみられる(氷雪気候)(永久凍結気候)である。

帯気候の高温多湿条件に適応しにくく、精神的な集中力や、肉体的な作業能力がいちじるしく低下する。環境に適応した体質としては、寒地から暖地へ移動したとき、2代目の子孫の汗腺が増加した例が明らかにされている。

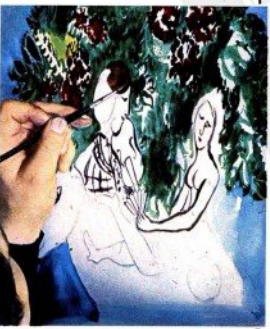
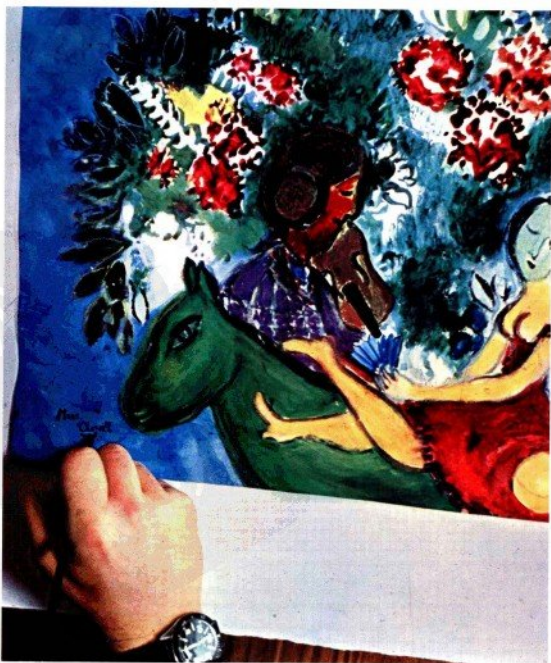
きこうろん 記号論 人間の文化的所産である記号(言語、符合)の適用および適用範囲を理論的に整理し、記号についての一般的理論を導きだすための論理。その方法論的研究を記号学または記号論理学という。19世紀以来、哲学の分野において発展した論理学の体系のなかから提出されたもの。ウィーン学派の論理実証主義哲学は、言語を人間の認識作用の基本的なモデル、すなわち「記号」として分析し、記号言語の理論を提出した。カールネーホおよびカールナップは、シュール、マルテュー、ブルームフィールドなどの哲学的言語学の成果を統合して科学的分析をおこない、記号論にメタ言語理論を導入、純粋記号論を確立した。現代アメリカの実証主義、分析哲学を代表するC.W. モリスは「記号理論の基礎」(1938)において、記号一般の生物学的、社会的考察から記号論を体系化した。彼は、記号の構成を語用論、意味論、シタックス(構文論または命題構成法理論)の3つの次元に区別し、さらに言語行動、記号行動を記述するさる記述の意味論や構文論を扱う記述的記号論の語用をも軸線に加えた。この理論は「記号、言語、行動」(46)でさらに深化し、生物体に反応あるいは行動をおこなえる刺激も記号のひとつと考える行動論的記号論がとけ込まれ、行動科学理論、情報理論への先駆となった。

きこうろりやく 記号論理学 現代論理学の主流を占める数学的論理学の一般の名称。従来の形式論理学から発展したもので、19世紀以後の論理学をさす。人間の思考形式を明らかにする法則を導きだすため、名辞や命題に限らずその関連や関係の構造一般を記号化し、数学的操作によって組織的に計算する演算理論、したがって数学的な基礎理論の展開が不可欠となり、論理計算、論理推論とも呼ばれる。ギリシアの形而上学はメタ哲学、前期ストア派の言明論理をひきついたアリストテレスの《正言三段論法》による名辞・概念論理学にはじまり、その偽・真という2つの二元論の矛盾を訂正しようとした数学者ブールによって再生した。彼は、ストア派の理論を継承して、概念の外延関係によって構成される命題の数学的研究をおこなったが、現代論理学の厳密な定式化に成功したのはフレイゲである。フレイゲは、その著「概念文字」(1879)において、従来の命題論理学の言明論理を定式化し、さらに集合・関係論理の数値体系を導入、命題の内外と外延を厳正に区別して、外延の真理値である真・偽(複数)の組み合わせによる関数計算をおこない、これを公理化した。その後、ラッセル、ルース、ルカシーゼビは、フレイゲの命題論理学に可能性、必然性、蓋然性など多価の様相概念を付加して定式化を積み、述語論理学(量化論理)の体系を提出した。

きこく 疑獄 政治問題に発展した汚職事件。本来は、有罪かどうか疑わしい裁判事件をさす言葉であったが、利権関係事件は、しばしば政治問題としてとりあげられながら、最終の段階でどうもやむやみになっていく性質をもっている。政治的な懸念が疑獄と呼ばれるようになる。したがって疑獄の特質は、利権関係の事実そのものよりも、政治的な問題として世間に提示されることにある。特定の人物の失態や内閣打倒をもくろんで依頼されたものもある。しかし、官権と利権の密着といわれる疑獄は、資本主義社会の体質的欠陥のあらわれのひとつであり、ことに、政府の保護下で産業資本が発展した日本では、明治以来、多くの疑獄事件が起きている。

きこほう 旗国法 おもに国際海商法において、用いられる船舶の本国法。国旗法ともいふ。船舶は、その属する本国の国旗を掲揚して国籍を示す。海商法において、この船舶が重要な準拠となるのは、海商に関する法律は船舶を中心にしているのが多く、一般的に船舶が所在法に準拠するのに対して、船舶は、法律の存在しない公海と、法律の異なる各国の領海を往来している特殊な動産であるため、一般的な国際私法に就くことが困難であるからである。とくに物権法に関しては、その船舶の本国法が適用されるのが一般的である。

きこんしゅぎ 復古主義 17～18世紀にヨーロッパでおこった古典重視の文芸思潮。ギリシア・ローマ古典を範とし、秩序および調和のとれた典雅端正な形式を尊



きさく 傑作 にせもの、贋作(がんさく)ともいふ。主として、制作者あるいは制作年代をいつて、買手による意図のもとにつくられた美術品をさす。文学その他の分野にも適用されるが、古来、絵画、彫刻、工芸などの美術の分野に、もっともその例が多い。一般に、現代作品もしくは実在した作品を模写したもので、特定の作者あるいは時代の様式を模倣したもの、いくつかの傑作をもとにその構図やモチーフをつつたものなど、いろいろな種類がある。傑作の歴史は古く、文藝に残る最古の

記録は、古代ローマのファエドルスが伝えるローマ人によるギリシア彫刻の偽作で、とくにプラクシテレスの作と称される多くの模倣が、貴族階級のあいだで珍重されていたといわれる。中世には、ほとんどその例がみられなく、ルネサンス期にはいるとふたたびあらわれ、とくに、古代エトルリア様式を模した彫刻、青銅彫などが、富かな古美術愛好家たちのあいだで重宝された。18世紀には、考古学の発達とともに、いかに偽物と模写のものがつくられるようになったが、19世紀以降、鑑定家の目

をあざむく巧妙な作品がつぎつぎとあらわれ、しばしば美術界を二分する真贋論争がひきおこされた。なほ、19世紀では、ギリシア、ローマ、ルネサンス初期彫刻の偽作者A. ドッセン、今世紀ではフェルメールの偽作で世界を騒がせたオランダのファン・メーレン、ピカソやミロの偽作で美術市場を揺るがせたD. スタイン事件などが有名である。写真●●●●は、《シャガール作品》を制作するスタイン。今日では、鑑定法も進歩し、赤外線、X線写真などによる科学的判別も適用されている。

重し、感情よりも理性、個性よりも普遍性を重視した。フランスのP.コルネーユ、フランス、ボナール、ドイツのクロプシュック、ロシア、ウーラント、イギリスのドライズ、ポーランド、S.ジジアンなどの作家がこれに属する。しかし、擬古典主義の用語は、むしろ、これらの作家を模倣し、形式偏重に堕した潮流の文芸に對する蔑称として用いられることが多い。

きさく ―― [写真項目] 前ページ。

きさご Umbonum costatum (写) 軟体動物腹足類ニシキウツ科の巻貝。日本、台湾島、中国の沿岸に分布し、浅海の砂底に多い。殻径はふつう1.5センチ、ときに3センチ以上になる。殻表は青黒色と黄色のまだら模様のある美しい渦巻となり、近縁縁のイボキザゴ、ダンペイキザゴとともに貝類工芸品に利用される。

きーザン 妓生 朝鮮の芸妓。かつては官妓と民妓とがあり、官妓は高麗時代の女楽をその起源とし、宮中に属する芸妓である。李朝時代のはじめのうちは、医術と技芸を担当していたが、のち、技芸だけが職掌となった。宮中の舞臺をおこなひ、また、家来では歌謡、舞蹈、古詩朗吟、器楽演奏などて宴人を接待し、詩や書画などの教養にも長じていた。政治に暗躍した妓生も少なくない。現在、大韓民国にいる妓生は民妓である。

きさん 蟻酸 無色で刺激臭のある液体。化学式 H-C

OOH。もっとも簡単なカルボン酸で、強い酸味をもち、皮膚にあれると水疱を生じる。融点8.4度、沸点100.6度。1670年にドイツのフィッシャーがアリを蒸留して得たのでこの名がある。かなり強い酸で、水やアルコールに溶ける。アルコールと基をもつて還元性があり、銅銀のアンモニア性溶液から銀を遊離する。実験室ではメチルアルコールまたはホルムアルデヒドの酸化によって得られ、工業的には一酸化炭素と水酸化ナトリウムを高温高压下で反応させて得られるギ酸ナトリウムを、硫酸で分解して製造する。各種有機溶剤、試薬、染料などの原料や成材などに利用する。

キサンババ Kisan Sabha All-India Kisan Sabha の略称で、全インド農民組合のこと。土地制度の改革と農民負債の伸引などを目標に、1936年、各地方の農民組織の連盟型として結成された。第2次世界大戦中、小作料の軽減などを要求して、44年、イギリス政府によって非法化されたが、戦後、合法となり、現在、インド最大の農民組織として活動している。

キサンチン xanthine (英) 無色の粉末または針状結晶化合物。化学式 $C_5H_4N_4O_2 \cdot H_2O$ 。2.6-ジヒドロキシプリンにめたる。125度で結晶水を失ひ、150度以上で分解する。核酸のプリン塩基であるアデニン、グアニンに脱アミノ化によって生体中に発生し、酸化されて尿酸になる。動物の尿、血液、肝臓中に存在する。

キサントフィル xanthophyll (英) 生物体にくくまれる色素のうち、水酸基、カルボキシル基、エーテル状基などを有するカロチノイドの総称。はじめは黄変した葉のなかに見えはじめは黄色素の名として用いられたが、その後、緑色の葉を黄色くする多くの生物体から同様の物質が発見され、それらを総称するようになった。もっとも普遍的に存在するキサントフィルはルテインである。

キサントン xanthone (英) 複素環式化合物の一種で、アピロンに2つのベンゼン環がついた構造をもち、ジベンゾ-アピロンともいう。無色の針状結晶で、融点173-174度、沸点350度。ベンゼンなどの溶剤にはとけるが、水には不溶。サリチル酸を無水酢酸とともに加熱すると生成する。キサントンは、単体として存在することはないが、誘導体が植物の色素として存在する。

きし ―― [写真項目]

きじ ―― [写真項目] 次ページ。

きし 擬死 きさまな動物、とくに昆虫にみられる、体がまったく動かさず死んだようにみえる状態。刺激に対する単なる反射作用であるが、防衛的な働きをもつことが多い。

きしき 儀式 宗教上の儀礼・祭祀を除く慣習化された風俗的作法や行事の形式をいうが、儀礼の要素の混入し



きし 騎士 一般的には、中世ヨーロッパの騎兵戦士身分を示す呼称。古代ローマでも、國で財産を築いた準貴族階級は騎士(エウティス)と呼ばれた。中世の騎士は、フランク王国ロリング朝における重武装兵であったが、やがて、彼らは、封建領主、僧侶、農民とは異なる新しいかつの階級を構成し、身分的に固定化したものとなった。騎士の責務は、封建領主の長男以外の息子に限られ、彼らは領地の相続権をもつた。きびしい一定の教育期間をすしたのち、騎士宣誓や武具の

授与などをとおそかにおこなうゲルマン古来の成人式にキリスト教の儀式を加味した騎士就任式をもつて、はじめて騎士となる。そして、彼らには一般人には禁じられていた武裝儀と決闘権が与えられた。写兵●12世紀の騎士。●14世紀の騎士。騎士は、領地を相続する兄や主権を有する父親に対して出仕や忠誠をつとめ義務はなく、いかなるところへ旅するとしても、いづれの領土に入ることにも自由であった。前期において騎士よりどころとしたのは自分の武勇であったが、騎士制度が発達す

るにつれて、騎士特有の風習と倫理である「騎士道」が形成され、武勇、謙遜、主君に対する忠誠、神への奉仕(写兵●十字軍に参加する騎士を見送る神父)、弱者の保護などが特徴されるようになった。なかでも、女性に対する献身的サービスなど、のちに美化された騎士像が生れたが、実際には野蛮であり、不義と暴力と冷酷さがその実体であったともされている。13世紀になって武器が出現し、歩兵を主体とする陣形が重視されるにつれ、騎士制度は衰退しはじめた。



1



4



2



3



5

きじ(目) Galliformes (目) 鳥類キジ目に属する鳥の総称。キジ、クジャク、ニワトリ、シメナチュウ、ライチュウなどおなじみの地上生の鳥をふくむ大きなグループで、7科約240種が知られている。一般に中型で、体は重く、翼は比較的小さい。足が強く、おもに地上で生活し、飛行力は弱い。鋭いくちばしとつめて、地上の食物をあさる。羽色や大きさで性差があり、一般に雄が大きく、美しい。キジ科の鳥は南アメリカ南部、大洋州、南極を除く全世界に分布し、約160種ある。代表種のキジ

(写真①)は日本産種であるが、近縁種の分布はひろく、また猟鳥として飼養され(写真②)、放鳥されたため、世界各地に分布する。キジは草屑にすみ、耕地にもあらわれ、幾いつで地面をひっかいて食物をさがし、植物の種子や根、昆虫、ミミズ、トカゲから、ときにはヘビまでも食べる。地上生活者であるが、ねぐらは樹上にあり、脅されれば方強くはばたいて飛ぶが(写真③)、遠くへは飛べない。ふつう一夫多妻で、繁殖期以外は雄同士、雌同士で群れをつくって生活する。雄にくらべて雌の羽色

が地味なのは、地上に巣をつくって抱卵するので、保護色として働くためと思われる。この相面は他の地上営巣性の鳥にもみられる。キジの近縁種にはほかに、キジより森林性が強いヤマドリ(写真④)、中国即ち首に白帯をもつコウライキジ(写真⑤)、美しさを誇る中国産のキンケイとギンケイ、ヒマラヤの高地にすむニジキジ。20世紀になってから発見された台湾のミカドキジ、中国の南部と西部に分布するハッカシなどがあり、雌の赤い肉だれや、全身光沢のある緑、紫、青、赤などの羽色



6



9



11



7



10



12



8



13

をもつ雄の美しさは格別である。キジ科にはほかに風鳥として知られるウズツ(写真●)、コジュケイ(写真●)、ヤマウズツ(写真●)ヨーロッパヤマウズツ、クジャク(写真●)、ヤウキなどがふくまれる。ニワトリ(写真●)はヤウキを家畜化したものである。ライチョウ科には、北半球北部にひろく分布するライチョウのほか、ヨーロッパやアジアの針葉樹林にすむオオライチョウ(写真●)、北アメリカの草原にすむツウサンライチョウ(写真●)など18種ある。ライチョウは、藍色の夏羽、純白の冬羽とい

う衣が天が有名であるが、ほかに衣がえするのには北極圏周辺のカワツツライチョウ、アラスカやロッキー山脈にすむオシロライチョウの2種だけである。ライチョウ科の鳥は群れて生活し、植物の葉、芽、花、種子を食べ、雄が集団でダンスをするなど特異な求愛行動をもつものが多い。シチメンチョウ科はもと北アメリカ大陸原産で、いまもわずかに2種の野生種がいるが、純種と生態環境の破壊のために、絶滅のおそれがある。家畜のシチメンチョウ(写真●)はいくつかの品種があり、肉

用として500年前から人間に飼われてきた。シチメンチョウによく似たホロホロチョウ科の鳥はすべてアフリカ産で、7種ある。野生のものは草原に大群ですみ、肉がおいしいので古代のギリシア、ローマ時代から家畜化されてきた。キジ目にはこのほか、中・南アメリカに分布するホウカンチョウ科約60種、オーストラリアとその近辺に分布するツカツクリ科27種、南アメリカにすみ、ひなの翼につめがあるという特異な存在のツメバケイ科1属1種がある。

な儀式は少ない。儀式はまた、英語のセレモニーの訳語でもあるが、語源のラエミアは「聖なる儀式」を意味するラテン語である。一般的には、宗教的儀式をもふくんだ神事・仏事・公事、風俗的行事、慶弔の礼や作法などの秩序および形式を総称して用いる。日本では朝儀・日中・夜中を区別する。平安時代に「儀式(きしき)」と「律令」ともに朝廷の政・祭行事、四季の行事を定めた朝儀の三代格式(弘仁、貞観、延喜)および「内裏(しやうがん)格式」など、三代格式書中に見られる朝儀(しやうがん)格式だけである。朝儀の制度は中国の唐儀に倣って作成され、それと併し、中儀・小儀の儀式が定められた。これより転じて、きまり、規範、法則などの意でも使われる。

きししゅうどうかい 騎士修道会 ヨーロッパ中世に騎士道精神と修道院精神との結合によって生まれた団体。宗教騎士団ともいう。活動の中心地は対異教徒戦と病人看護。十字軍を後援にエルサレムで結成されたのがはじまりで、頂点たる騎士は修道士団に属し、清貧、貞潔、服従を誓い、特別な宗規にしたがって規律ある宗教生活をいとなみ、聖地巡礼、近江保護、貧窮者援助などもあった。12世紀はじめに結成されたフランスのテンプル騎士団、イタリアのヨハネ騎士団、12世紀末のドイツ騎士団などが代表的なもの。13世紀にはじめても、多くの市民たちに特別の便宜を与えたり、国家に奉仕したりする新しい任務も加えられ、その精神を温存もなく行動面に発揮した。しかし14世紀ごろから教皇権の衰

退とともに騎士団上層部の腐敗から内部崩壊がおこり、徐々に積極性を失い、16世紀にはいつて新興ブルジョアジー勢力の発生のともない、根拠としての修道院や領地などの多くが諸侯に没収され、消滅した。

きしせんそう 騎士戦争 1522～23年、新道したドイツ、ライン地方の帝国騎士が、教会諸侯に對しておこした反乱。当時、軍制の変化で軍事的機能を失われ、貨幣経済の発達と帝権の衰退によって封建地主としての生活を脅かされていた帝国騎士たちは、おりからの宗教改革運動に刺激されて、ランタウの騎士会議で盟約を結んだのち、プロテスタント騎士ジグムントにひきいられてトリールの大司教兼選帝侯を攻撃した。しかし、プロテスタント軍、ヘッセン方伯と同盟したプロテスタント軍の猛攻にあつて騎士軍はたちまち敗北、首領ジグムントは戦死、思想的な改革者であった人文学者の騎士フツツモスエヒトは戦死、以後、騎士は諸侯に従属した。

きしたいけん 既視体験 心理学の用語。実際には、はじめての経験であるにもかかわらず、以前に経験したことがあるような感覚をもつことをいう。既視体験が、てんかんなどにみられるような脳の障害を原因としておこる場合は、病的なものともされる。

きしたくにお 岸田國士 1890～1954 日本の劇作家、小説家、演出家。陸軍学校を経て、演劇研究のためフランスに留学、帰国後の1924年に戯曲「古い玩具」「チロ

ルの軌」で劇界に新風を運んだ。以後、「紙風船」(25)、「牛山ホテ」(29)などのフランスふう心理主義戯曲や「山崎旗」(29～30)、「紙風船」(43)などの小説を発表するとともに演出家として活躍。日本近代劇文学樹立に多大の貢献をした。評論、フランス文学の知識も多い。

きしたりゅうせい 岸田國士 1891～1929 日本の洋画家。中学中退後、1908年から黒田清輝に洋画を学ぶ。10年、外光派の作品に感銘を受け、12年には高村光太郎とフツツザン会を結成。しかし、まもなく欧米クラシックに感化され、克明な写実主義を追求して連作「裸子像」などを発表。東洋的な装い内面を開拓した。

きしつ 氣質 個人の情緒や感情の傾向を恒常的に規定する、素質的な特性。性格の生物学的基盤から、幾種類かの分類がなされている。ヒッポクラテスは体液から氣質を分類して、楽天的な気分の多血質、陰気な憂鬱質、鈍感で無関心な粘液質、激情的で怒りっぽい胆汁質の4つの型に分けた。もっとも代表的な氣質の分類は、クレッチマーのこなつたものである。彼は、肥満型と細長型の体格が、それぞれ精神病的な特質をもつことに注目して、前者を衝動質、後者を分霊質とした。衝動質は、社交的、親切、温和などの基本的性質をもち、同一人になつて、種族型と鬱鬱型とが循環してあらわれる。いっぽう、分霊質は、非社交的で、まじめで陰気な基本的性質をもち、現代では、剛直な型体格の、感情の激化や衝動の



きしふんかく 騎士文学 中世の騎士道を描いた文学。騎士道物語という。12世紀から13世紀のフランスで盛んに書かれ、ヨーロッパ文学の一分野を形成した。その土壌は騎士制度の事実であり、主人公はその英雄である。フランスの叙事詩には、ブルトン系とカワリグ系との2大群があるが、12世紀には叙事詩の巨大な作品を生み出して、騎士文学の発祥地となった。ブルトン系の内中騎士の活躍が主題となる騎士道物語もこの時代に発達し、その代表的作家はクレティアン・ド・トロワ(代表作

「エレクトとエニード」であった。イタリアでは、騎士文学は12世紀に出現して16世紀までつづき、17世紀にはいつて衰えた。その代表作品としては、ルイジ・ダウネの「ジストコ」(騎士模倣会)、ジャン・ジョルジョ・トリヴィアの「ゴット人」に解題されたイタリア、マッテオ・マリヤ・ボイアルドの「恋するオルランド」、ロドリーコ・アリオストの「狂えるオルランド」(写真●カポスフォルドによるフレスコ壁画のオルランド)であり、いつづつ、タッソーは、叙事詩における騎士文学の伝統を継

いだ(写真●ドラクロワの「オリンドとソフロニア」、スペインでは、金貨の模倣にこの題材を模倣的にとりあげたため一種流行をあげ、ムーア人に対するキリスト教徒の戦いを表現する主題の叙事詩が書かれた「写真●13世紀の伝説に描かれたスペインの騎士」)。こうした主題は、セルバンテスの「ドン・キホーテ」において再現された。この作品では、従来の騎士道物語の形式と近代のユーモアが巧みに融合し合っている(写真●つづね織りに描かれたドン・キホーテのエピソード)。

きしゅつしんりかく 記述心理学 精神現象は、構造の連関によって構成されるものであるから、その現象を忠実に記述し、分析することが本質であるとする心理学。分節心理学ともいう。ディルタイが主張した考え方。彼は、精神の構成要素の結合から精神現象を説明し、因果関係を導きだそうとしたスペンサーやブントの心理学を、仮説的な説明心理であると批判した。精神現象は、限られた数の要素で構成されたものではなく、仮説的な要素では説明できないとして、できるだけ詳細で客観的に現象を記述し、それを分析することによって構造を探究しようとするものである。この考え方は、フッサールやフッサールに上つていった。

きしゅつろん 技術論 技術に関する論説、または哲学的思想。理論的な科学と実践的な技術を区別した技術思想は、バグシヤ時代のアルストレスナーの著書にすでにみることができ。ルネサンス時代には、自然のなかに位置づけられた新しい人間観が生まれ、技術論が発達した。イギリスのベコンは「ノブム・オルガヌム」(1620)を著し、技術の進歩にみえし新しい認識方法を提唱した。産業革命以後は、自然科学の進歩を基礎に生産技術が理論的に発展し、応用科学としての技術学または工学という新しい知識体系が生まれた。19世紀末から20世紀初頭にかけてのドイツでは、新資本主義国として技術を重視し、その理論的認識を確立するために多くの学者によって哲学的思考がなされた。カッパやフッサールは道具などの生産手段を重視し、ゾッパルトとゴットル

は技術と文化や経済との関連性を説きおこしてドイツ技術論の礎とされた。資本主義世界では、技術の進歩は世界文化の発展をうながすという思想傾向が強く、アメリカ合衆国のペブルンによる技術主義思想にみきつがれた。しかし、ドイツのシュベングラーは合理主義を批判し、反技術主義をかかげて人間と技術の有機的結合にもつづく文化史観を展開した。いっぽう、社会主義国では技術の社会的連関性が重視され、資本主義的な技術論を批判したすくなくとも思案が生まれた。第2次世界大戦以後の技術論は、それまでの技術主義一辺倒から脱し、人間存在の根拠を尊重する哲学的風潮が生み出されている。

キシュファルディ Kisfaludy Károly 1788-1830

ハンガリーの劇作家。西家志望から創作をこころざし、オーストリア市下の国民感情の高揚を訴えた史劇「ハンガリーのギョタルム」(1819)によって、国民詩人の名を高めた。22年以後、文学グループ「オーロ」を結成し、同名の文学年鑑を主宰して文壇を指導した。喜劇「求婚者」(19)、「31歳」(28)など。

キシュファルディ Kisfaludy Sándor 1772-1844

ハンガリーの詩人。キシュファルディ・カーロイの兄。軍役に服したのち、ペトルカルカの叙情詩集「テムフイの恋」(1801-07)を発表して名声を高めた。ほか「ハンガリー古代物語集」(07-18)などの作品がある。

きしゅんがく 規準学 エビクロス派において、論理学

をさす言葉。真理の現象を明らかにするための論理的方法を求める学問。

きしょう 写真項目

きしょう 結晶 ある固有の結晶配列が輪転双晶を形成し、その配列の軸対称性がより高くなった結晶。霞(かすみ)石にその典型がみられ、本来斜方晶系の配列が、双晶の結果、全体として三方晶系を擬装するようになる。配晶は糸線方向や顕微鏡観察で識別できる。

きしょう 義浄 635-713 中国、唐代の僧。671年、華南で海路インドに渡り、675年からチーラン(即ち暹羅)に滞在。仏教の興隆をきわめた。695年、400部近いサンスクリット仏典をもって帰国。仏典翻訳のほか、著書「大唐西域求法高僧伝」2巻、見聞記「南海寄帰伝」4巻など。

きしょうえいせい 気象衛星 気象観測を目的として打ち上げられた人工衛星。世界で最初の気象衛星は、1960年にアメリカ合衆国が打ち上げたタイロスであり、テレビカメラや赤外線観測装置を搭載し、地表の雲の分布状況を撮影することを目的としており、ほかに晴雲や海水も撮影できた。タイロスのあと、合衆国のニンパス、エッサ、ソビエト連邦のメテールなどの気象衛星が次々と打ち上げられ、全地球面の観測をおこなっている。

きしょうがく 写真項目 次ページ。



きしょう 記事 社会新聞、職業、名所、所産団体などをあらわすための記事。相子、旗などにけりしるし。この記事は古くは日本までさかのぼり、和歌の軍装を遠くから購置できるような、聖なる動物や守護神を旗にデザインして用いたことにある。12世紀には、十字軍の遠征にも、騎士各人の持ち物を表すために、旗や甲冑などにそれぞれのしるしを用いた。これが子孫にうつりつがれ、後世にはその家の出自をあらわす紋章として、あるいは貴族のしるしとして、たいせつに

れた。いっぽう、商業上の記事もさきかきめく古くあり、ローマ帝国の時代にはすでに用いられていた。中世のころには、商標の力にもとめられるものが増えつづけていた。中世には商人や職人が、それぞれの属している下駄をあらわすために記号を用いたし、学生も大学や団体の記号を使うようになった。こうした記号は、旗、帳、甲冑のほか、外装、靴、馬具、サント、帽子などにも施されたり、縫いこまれたり、また彫刻された。デザインとしては、横線、縦線、斜線な

どを組み合わせた幾何学模様のもののほか、アッリアのライオン、ローマの鷹、グリフィンと呼ばれる獣身有翼の怪物、百合、ばらなどが一般的で、遠くからでも人目をひくように同色化されている。ホルバイン、グルーネ、フーネ、クルーベなど記事のデザインを手がけた芸術家も多く、芸術的に高度なものも数多くある。写真●は、ドイツ、デュッセルゲンのビヤホーの看板。写真●は、王家の記号にけりしるしの肖像画から写真●は、イスラム教徒の軍服記事で三日月と天の記号。

きしょうかんそくせん 気象観測船 海上において海洋観測とともに気象観測をも実施する船舶のこと。気象観測船の観測要素は、海上における気温、気圧、湿度、降水量など。ほかに、風速、うねり、海水温度などが加わることもある。観測には、定点観測と、状況に応じて移動しながら実施する観測とがある。定点観測をおこなう船のことを定点観測船という。

きしょうざい 偽証罪 法律の定めに従って宣誓した証人が虚偽の陳述をした場合に問われる罪。法律の規定にもとづいて宣誓をした証人であれば、たとえ虚偽の証言をおこなったとしても、同罪に問われることはない。偽証罪にはまた、宣誓をした証人、通訳人が虚偽の鑑定、通訳をした場合も含まれる。

きしょうせいどり 希少性の原理 人間の欲求に対して、その光り輝くである資源、財貨などの供給は制限されており、相対的に希少であるという経済学上の理論。この希少性のために、資源、財貨、サービスの社会に対する合理的な配分が、近代経済学の究極的な主題となっている。L.ワルラスは、希少性の原理を発展させて限界効用学説をたて、それが今日の一般均衡論を体系づけることになった。カッセルの一般均衡論は、価格に基づいて、制限された供給と需要が一致するように決定されることを価値無用論でもある。

きしょうたい 気象台 気象観測をおこなって、短期、

長期の天気予報や気象情報、さらに気象上の統計作成などの仕事をする機関。気象台は、測候所、船舶、航空機などからなる気象観測網をもち、これによって1日数回の観測をおこなう。地上、海上、高層大気の気象状況を発表して、台風や冷害などによる災害の防止や日常生活の便宜と安全などに役立っている。なお、気象観測の国際協力機関としては、WMO(世界気象機構)がある。

きしょうてんけつ 起承転結 中国の詩、とくに絶句の修辞法および構成法の名称。絶句は4句からなり、第1句(起句)で詩意を提起し、第2句(承句)で起句をうけてその特別な部分をうたい、第3句(転句)で詩意を転じ、第4句(結句)で全体を収束する。8句からなる律詩では、2句づつを起、承、転、結に配する場合もあるが、あまり用いられない。一般には、転じて、法、文章、物語に筋道がとおり、全体にまとまりがあることをいう。

きしょうびょう 気象病 気象変化に関連して発生した1.症状が変化したりすると考えられる病気の一種。気象変化のなかでは、とくに前線、フェーン現象、気圧の急激な変化などがあげられる。気象病として考えられるものには、感冒、筋炎、気管支炎など、目眩、頭痛、鬱鬱感、てんかん、しんかの発作、リウマチ、神経痛、脳障害の悪化、自律神経の不安定などがある。

きじらみ(科) Psyllidae (科) 昆虫類半翅目の1科。世界にひろく分布し、約1000種ある。体型はセミに似る

が、体長1~4ミリのきわめて小さい昆虫類である。幼虫は活発で、発達した後肢で跳躍したり、体より大きな翅で飛んだりする。木の葉や枝にとまり、液汁を吸うので、林業、果樹園芸に害を与えるものも多い。また、葉に虫嚙(ちゅうえい)をつくるものもある。クワにつくクワツキツミ、ナシを食害するナシキクラミなどがある。

キジル Kyzyl ソビエト連邦中央シベリアの南部、トゥヴァ自治共和国の首都。人口5万2000(1970)。西サヤン山脈南のトゥワ盆地、大イェニセイ川と小イェニセイ川の合流点に、1914年に建設された都市であり、道路によりアバカンと連絡している。産業としては、皮革製造、製材、自動車修理など。

キジルクム Kyzyl-Kum ソビエト連邦の中央アジア、カザフ共和国とウズベク共和国にまたがる砂漠。面積約30万平方キロ。名称は「赤い砂漠」を意味する。北東はシルダリヤ、南西はアフガニスタンにおよび、両河川の流入するアラル海が北西端となる。年降水量が100ミリ前後の乾燥した気候であり、おもに砂漠におおわれるため、ほとんど農耕に適さないが、内河川流域の灌漑が試みられている。また、石油や石膏などを産する。

キルセンぶどう 千仏洞 中国北西部、新疆(チンチヤン)ウイグル自治区の庫車(クーチ)近くにある仏教遺跡。5~7世紀にイラン系トハフ人によって天山(チンチヤン)山脈南麓、ムズルト川付近の岩壁につく



1



3



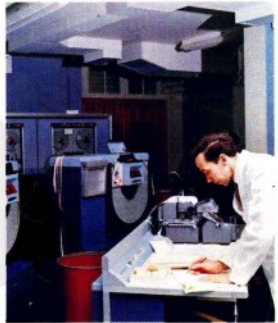
5



2



4



6

きしょうがく 気象学 大気中に生ずる物理現象を研究する学問で、対象の多様性に対応して、さまざまな研究分野がある。おもなものとしては、大気圏の構造を中心とする観測気象学、降水や雲結の機構などを扱う物理気象学。さらに、気象学、応用気象学などがある。気象を扱う学問は、古くギリシア時代からあったが、近代的な気象学といえるものが確立したのは、電信技術の開発された19世紀中葉のことである。電信技術を開発した大気図作成を基礎としていた。その後、1930年ころか

ラジオゾンデをとりつけた気球が使われはじめ、従来の地上観測に加え、高層の気温、湿度、気圧、風速などのデータ採入できるようになった。さらに、第2次世界大戦中に開発された電子計算機の登場は、複雑な大気運動の数値解析を可能にし、戦後の40年から正確な数値予報がおこなわれるようになった。60年代になると、気象観測用衛星や気象衛星を使った観測もおこなわれるようになり、地表の雲の分布写真像など、大気中の現象に関する知識や情報はいっそう正確なも

のとなった。今日、世界各地に設置されている数多くの気象台は、常時の通信回線によって相互に連絡し合っており、その観測基準やデータ送信の特殊コードは、WMO(世界気象機構)によって定められている。写真①各地からデータが集まるギリシヤの中央気象局の受信装置。②気象衛星が撮影した地表の雲の分布図。③④データが記入された大気図の解読。⑤中央気象局から電送されたデータを受信する地方局の受信装置。⑥24時間後の予想天気図を作成する電子計算機。

られた奥寺群で、その数は100をこす。20世紀には、ドイツ人グリニウーデルらが発見し、背後の深谷からも、第2、第3の窟寺群を発掘した。これらの窟寺群のうち、初期のものにはガンダーツのほかに遠くササン朝ペルシアやビザンチンの影響もみられる。後期には特徴ある形式が生みだされた。トンネル形の天井や壁面には鮮やかな緑や青を基調として小乗的な説法画や本生譚などが図式化して表現され、奥壁には仏像を安置したのがそれである。同様の窟寺はクムトゥフ、スパンはしめクーチ一部にみられる。なお、この様式は、シロコクや敦煌などの年代の古い遺跡にもみられる。

キシレン xylene (英) 無色の液体。化学式C₈H₁₀(C₆H₄)₂。メチルベンゼンにあらた。p-キシレン、m-キシレン、o-キシレンの3種の異性体があるが、いずれも140度内外の近い沸点をもつて、分離だけでは分離できない。コールターの留留や、ガソリンの高留で得られ、ゴムや塗料の溶剤として用いられる。

ぎしんじん 魏志倭人伝 中国、晋の陳寿が撰した『三國志』のなかの「魏志・東夷伝」の倭人の条の通称。古代日本に関して記述された中国の歴史書のなかでは、後漢の『漢書』の地理志について古く、3世紀後半に成立した。朝鮮半島から倭(日本)にいたる道程や、倭の風俗、習慣、社会などのほか、年号呼(西)に紀年法を記した野馬台(西)や三才(西)の諸国(西)の中心史料になっている。

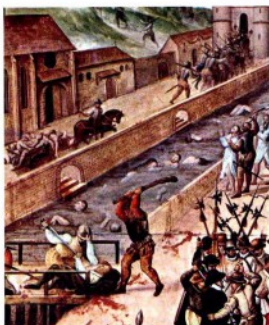
キージンガー Kurt Georg Kiesinger 1904— ドイツ連邦共和国(西ドイツ)の政治家。弁護士から、1949年連邦部の総選挙で、キリスト教民主党から出馬し当選。68年には、バーデン・ヴュルテンベルク州首相となった。在任中、マルクを最強の通貨とし、フントを外相に起用してルーマニア、ユーゴスラビアと国交を回復するなど、東西の緊張緩和にも資した。69年に辞任。

ぎじんかん 擬人観 人間に特徴ある形態や諸性質を、神や自然の現象に移しかえて理解する態度。アントロポモルフィズムの訳語。ギリシア語のアントロポス(人)とモルフェ(形式)に由来する言葉。古代ギリシア、古代エジプトの宗教に特徴的な傾向であり、前6世紀の哲学者クセノフォネスは、その神学においてギリシア宗教の擬人観を批評した。擬人観の一種に、キリスト教に特徴的な神人同形説(テアントロピズム)がある。

ぎしんなんぼくちうびじつ 魏晉南北朝美術 中国の漢代から隋代にいたる魏晉南北朝時代(221—586)の美術。魏、晋時代の絵画は、題材、様式ともに漢代絵画の伝統をうけつづ、儒教的な勸戒図が依然として制作されたが、いっぽう、仏教の興隆とともに、仏画の制作が盛んになつた。とくに、漢代以来、文人画家が数多く出現し、東晋の顧愷之(西)などが、従来の類型的な風景画にかわって、山水画の分野を開拓した。南北朝時代には、山水画のいちじるしい発達とともに、

宋の陸探微、梁の張僧繇(ちようそうよう)などの職業画家が輩出し、画題がいちじるしく増大して、花鳥、風月、道釈人物、山水など、唐代以後の中国絵画の画題がほぼ集大成された。なかでも、特筆すべきは仏像彫刻の分野で、南北朝時代にめざましく発達し、ことに北魏時代には、敦煌、雲崗(うんこう)、龍門などに大石窟が造営され、仏教美術の一大点を示した。これらの彫刻は、明らかにガンダーツ彫刻の流れをくみ、ギリシア、インド、西域などの仏像彫刻の様式の混雑も、ミナ融合がみられるが、すでに中国化されて、明朗円満な表情をしているところに特徴がある。今日に伝わる魏晉南北朝時代の絵画作品としては、顧愷之の『女史箴図巻』(大英博物館蔵)、『洛神賦図』のほか、敦煌・仏洞窟遺跡と内地出土の絵画遺品、支植山石窟壁画、山西省大同出土の司馬金龙墓の諸絵本板碑風(482)などがある。とくに、北朝の絵画遺品はおぼろしい数にのぼる。

ぎじんほう 擬人法 抽象的観念や動物などを人格化して、生きた人間のように取り扱う修辞法。英語のパーソニフィケーションに相当し、ギリシア語のプリソプソイア(人形取り)に由来する。この表現方法は、原始時代のアニミズム(自然崇拜)から発生したと考えられ、東西を問わず、古代の神話伝説のなかに数多くみられる。やがて、古代ギリシアに『イソップ(アイソプ)物語』が生まれて動物寓話の先鞭をつけ、中世から近世にかけて、文学、絵画、演劇などの有力な1分野となった。今日でも、風刺的、諷刺的表現のひとつとして用いられる。



ギーズこうアンリ 一公 — Henri de Lorraine, Duc de Guise 1550—88 ギーズ公フランソワの長子で、1563年、3代目の公爵となった。暗に反仏していたため、アンブラスの戦い(西)で、カトリック教徒の首領として、カトリック教徒と呼ばれた。彼はカトリック教徒の首領として名を挙げ、カトリックの組織、ユグノー教徒に対するサリ・バネル(西)の大暴行(西)を組織し、勢力を拡大した。『写真』(西)。在位中(西)のトリック勢力の支持を得て、76年に神聖同盟を組織し、さらに男子相続人のない国王アンリ3世の王

位継承をめぐって、国王と対立した。継承者にはブルボン家のカトリック王のいとこにあたるアンリ・ド・ナバルが決定された。彼はカトリック教徒で、カトリック教徒の首領として名を挙げ、カトリックの組織、ユグノー教徒に対するサリ・バネル(西)の大暴行(西)を組織し、勢力を拡大した。『写真』(西)。在位中(西)のトリック勢力の支持を得て、76年に神聖同盟を組織し、さらに男子相続人のない国王アンリ3世の王

の戦い(西)がおこった。はじめて国王は、彼と結んでプロテスタントのアンリ・ド・ナバルに対戦したが、彼がパリに逃げた。行政権を革命評議会にゆだねた(西)で、8月6日12日、彼は一時王位に上った。アンリ3世に王位を返し、かわりにユグノーを利を得る転機を捉えた。彼は国王の降参中に任ぜられたが、国王の信頼は得られなかった。神聖同盟の要請によって開かれた全国三部会(写真)において、国王の決った御書によって暗殺された(写真)。

きす *Sillago sihama* (魚) 硬骨魚類スズキ目スズキ科の海水魚。太平洋、インド洋など暖海の沿岸部にひろく分布する。シロギスともいう。体長約30センチ。体は細長い円筒形で、背面は淡黄褐色、腹面は白色。接ぎ釣りまたは釣りの対象魚として人気がある。塩焼き、天ぷらなどはきす味である。近縁種には青色をおびるアオギスがあり、主より大きい味が劣る。

きす *Pterothrissus gisus* (魚) 硬骨魚類ニシン目スズキ科の海水魚。日本列島の沿岸に分布し、200メートル以上の深海域にすむ。体長約60センチ。体は細長く、円筒を密生するが、頭部にはうろこがない。背びれの基底はきわめて長く、ほとんど全背面を占める。幼魚は比較的浅海にすむが、成長とともに深海へ移る。底引き網やええなわとれ、上等なまきすの原料となる。

ギース *Constantin Guys* 1802-92 フランスの画家。オランダ生まれ。両親はフランス人。父転居したのち、クリミア戦争にイギリスの絵師新聞特派員として従軍。のちパリに定住して、素描画家として人気を高めた。西風は、生来の冒険好きを反映して、戦争を好んで描いたほか、第二帝政期のパリの風俗を酒祝な筆致で描き、フランス趣味を模倣させている。

きすいしょう 黄水晶 水晶の一種。シトリンともいう。淡黄色または黄褐色で、古くから飾り石に用いる。主産地はブラジル。紫水晶を加熱処理すると人工の黄水晶が得

られる。宝石店でトパーズの名で売っているものには、この人工黄水晶が多い。

きすいせん *Narcissus jonquilla* (草) 単子葉植物トウモロコシ科の多年草。南ヨーロッパ産のスイセンの1種で、林植球根草として観賞用にひろく栽培される。3-4月ごろ1本の花茎をのぼし、先端に4-5個の黄色の花をつける。花は狭いオレンジの香りをもち、オレンジ香の割合に用いることもある。

きすう 奇数 整数のうち2で割り切れないものを1、3、5、7……、-1、-3、-5、-7……など。

ギスカール *Robert Guiscard* 1015?-85 南シチリア王国の基礎を築いたノルマン人の征服者。ノルマンディ公国の貴族の出身で、1046年にイタリアに渡り、以前から諸侯としてイタリア各地に存在していたノルマン人の首長となって、南部イタリアの征服を進め、ビザンティン支配下のプーリア、カラブリアをあいもあいとして併合。59年にはプーリア大公を称し、教皇から征服地を封土として与えられた。61年、サセセン支配下のシチリア島を攻略し、71年にはイタリア半島におけるビザンティン最後の拠点パレルモを陥落させ、ギリシア本土にも攻撃の手を加えた。神聖ローマ皇帝ハインリヒ4世と教皇グレゴリウス7世の聖職叙任権闘争にさいしては、教皇側に加わって皇帝軍を支援し、84年にはローマを制した。同年、ビザンティン遠征を再開し、セファロニアを包圍してい

る最中に、熱病で倒れた。

ギスキア *Léon Gischia* 1903- フランスの画家。タックス生まれ。レジェの弟子。1937年、レジェ、ル・コルビュジエとともにパリ万国博覧会「新時代」展示館を制作。第2次世界大戦後はサロン・ド・ナーに参加し、簡明な幾何学的構成による抽象画を描いた。舞台美術、木の植紋なども多数ある。サロン・ドートンヌ会員。

ギーズ1世 家 16世紀のフランスの名門貴族。フランソワ1世に仕えたクロード・ド・ロレーヌ (1496-1550) が、1527年、戦功によってギーズ公に封ぜられたのはじまる。その子マリイ (1515-60) はスコットランド王となり、マリイの弟フランソワ (1519-63) も戦功をあげて、マリイの子マリイ・スチュアートをフランソワ2世の妃とし、次第の権威を確立 (1524-74) とともに外戚として国政の実権を掌握し、62年、バジリーの虐殺をおこなった。フランソワが新教徒に暗殺されたあと、その子アンリ (1550-88) は72年のサン・バルテルミーの虐殺を指導。旧教同盟の首領として国王アンリ3世と対立し、スベイン王フェリペ2世の援助を得て王位を脅かしたが、国王アンリに暗殺された。その後千代女は勢力を回復することなく、1675年に家系は絶絶した。

ギーズこうアンリ 写真項目 前ページ。

ギーズこうクロード 公 Claude de Lo-



きせいときょうせい 共生と共害 種類の異なる生物がある種の利害関係をもちながら生活する現象。多くの生物は、生きるための栄養を他の生物体から獲得しており、植物、捕食動物、肉食動物のあいだには捕食関係による、いわゆる食物連鎖の成立する。とくに他の生物の体上に寄生したり、体内にはいり込んで栄養を吸取る現象を、寄生という。寄生をうけた生物を宿主といい、寄生者によって多少の害をうける。寄生関係の条件としては、一般に宿主が被害をうけること、寄生者が宿主より小さ

いこと、寄生の期間がある程度持続することなどがあげられる。いっぽう、寄生者と宿主の両者で利益の交換がみられる現象があり、これを一般に共生と呼ぶ。共生では、両者のために利益を帯びている場合と利殖共生、片方だけが利益を得る場合を片利共生という。しかし、これらの区別は、個体同種、個体と集団(群)、群と群という関係を考えると、かならずしも一様に定義されるものではない。たとえば捕食関係全体を生態的にとらえると、捕食者と被食者の関係は、生物集団における寄生者と

宿主の関係とすることができ。しかも、近アメリカのオオカミとシカの捕食関係を研究した生態学者の説によれば、オオカミがシカを食するという希少な群関係は、実際にはシカの個体数の増加が抑制され、シカの個体の保持に役立つという相利共生の意味をもつことが明らかにされた。このように生物はその生態系の環境要因として他の生物と有機的な相互関係を結んでおり、寄生も共生も生物の相互作用の一種にかならない。植物の寄生には、光合成をしながら一部の栄養を宿主に依存す

きこうふ

rraine, Duc de Guise 1496-1550 フランスの貴族。ギーズ公家の祖。ロレーヌのルネ2世の子で、その後継者。1527年に大公となる。フランクフルトに仕えてイタリア戦争に参加した。またギーズと戦ってシャンパニュとブルゴーニュの支配権を獲得した。ブルボン家のアントワネットと結婚して12人の子供をもうけた。

ギーズこうフランソワ —公— François de Lorraine, Duc de Guise 1519-63 フランスの軍人。クロードの子。フランクフルトに仕えて、対ハプスブルクのイタリア戦争に参加。顔に負った傷からむこう傷と呼ばれた。またアンリ2世のもとで、イギリスからのカレール奪取に活躍した。フランスにおけるカトリック勢力の指導者で、プロテスタントに対して非愛国的な彼は、1562年にバシーのユグノー教徒の大虐殺をあり、ユグノー戦争の勃発を招いた。オルレアン戦いのさい、新教徒に暗殺された。

キスチケルケス cysticercus (英) 縞形動物多節虫類の幼虫。1型。糞のうけひ虫ともいふ。中間宿主の体内にみられる。大きさはエンドウから鶏卵くらいで、液体を満した小囊に包まれる。小囊のなかには頭部が露出しているといわれており、中間宿主が終宿主の体内に摂取されると、頭部が反転して外にあらわれ成体となる。

キーストンぎきき —鳥獣— 1912年にアメリカ合衆国の映画製作者ジャック・キーストンが創設したキーストン社

で製作された一連の喜劇映画。セネット喜劇ともいわれ、ギャグとトリック撮影をスピーディに活用し、(スラップスティック・コメディ—どたばた喜劇)を創始した。

キスリング Moise Kisling 1891-1953 フランスの画家。ポーランドのクラクフ生まれ。1910年パリに出て、ピカソ、ドランなどと交わり、第1次世界大戦に義勇兵として従軍。のちフランスに帰化し、モディリアニの親友として、その最期を見とけた。初期はスプリングの暗い調だったが、ドランの影響を受けて簡潔な線法に移り、やがて新古典派ふうの調子を形成した。少年像、少女像、風景、静物など、独特の憂鬱美で知られる。

キスリング Vidkun Quisling 1887-1945 ノルウェーの政治家。レニングラードで大使館付武官をつとめた。1931年、国防相となる。ドイツのナチ党に共鳴する国家統一党を組織し、第2次世界大戦中、ナチ軍のノルウェー侵略に協力。ナチ軍の親密な協力者として(動員解除のための委員)となつて、42年には傀儡政権の大統領に就任。解放後、捕らえられて裁判で死刑の判決をうけ、処刑された。以後キスリングという名前は(売国奴)の代名詞として使われるようになった。

ギゼー Gizeh エジプト北東部にある同名州の首都。人口71万1900(1970)。ギーズとも呼ばれる。ナイル川左岸。築堤によって北東河岸のカイロと結ばれた衛星都市。カイロ大学や動物園など文化施設があり、市の西

には、古代エジプトのツフ、カフラ、メンカウラ王の三大ピラミッドやスフィンクスなど遺跡が多い。

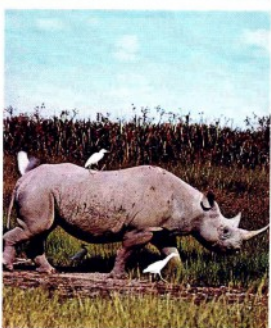
ぎせい 擬制 同一の効果を生じさせるために、実際には異なるけれども同一のものとする。法律の収斂。法學における術語としての擬制は、法上の擬制と証人上の擬制の2とありがある。法上の擬制とは、ある法律事実甲と異なる法律事実乙を同一とみなすこと。民法において婚姻した未成年者を成年とみなしたり、刑法において、窃盗・強盗罪における財物のうちに電気が入るかどうかをその例である。いっぽう、存在しているが否か不明確な甲を法律事実乙として証明したいとき、乙を証明したことになる。甲も証明されたことが証人上の擬制となる。この場合、反証によってつづがえられるような関係は(推定)と呼ばれ、擬制とはならない。

ぎせい 犠牲 本来はいけにえを意味するが、一般に、価値ある目的、信念または他者のために、自己を否定し命を捧げてつづこと。その心情を犠牲的精神、行為を犠牲的行為などとする。いついかなる利己心、功利の動機をもたず、神、正義、人類、社会のために殉ずること。犠牲の精神をみずからに利す態度は、宗教的、思想的、政治的なさまざまな結社にみられる基本的特徴である。犠牲の宗教的意味については供儀のいけにえによって明らかとされる。犠牲の語源であるラテン語のサクリフィチウムは(神聖化されたもの)の意で、本来は動物を殺して、その血肉を神聖に捧げることであるが、



る半寄生と、すべての栄養を宿主からうける全寄生がある。半寄生にはフナやエノキなどの根につくドリドリ、金盞花にはストロなど根につくランパンジウム、菜や木の葉に寄生根をのびて栄養をとるネリナズミ(写真●)などがある。ムギの黒粉病をおこすある種の担子菌(写真●)は、加害者の大きい寄生者である。動物の寄生には、外部寄生と内部寄生がある。外部寄生者の代表格はダニ、ノミ、シラミで、温血動物にとりついて血を吸う(写真●はワトリのノミ)。魚や貝などにつく外部

寄生者もある。内部寄生者では宿主を食いつくす例も多い。エビの仲間であるオオタニシは、ホウの一種エビダルの体内にいて、内部器官を食いつくして生(写真●)。また、各種の寄生バチは昆虫の卵や幼虫などに産卵し、かかった幼虫は宿主を食べて育つ。背骨動物の体内にすみつく寄生虫も、如害者であり、人の寄生虫も多い(写真●)。また、寄生バチは、さらに植物に寄生するハダニ、タマバチなどの昆虫もいる。いっぽう、典型的な共生は、ウメノキコやサルオガセなどの地



衣類にみられる。これは菌類の組織中に菌類をとりこんだもので、菌類は菌類に水分を与え、菌類は光合成によって栄養を菌類に与える。まさに両者不可欠の共同体である。動物では、シロアリとその消化管内にすみつく腸内細菌の関係がそれで、シロアリは食べた木のセルロースを共生菌に分解してもらい、栄養としている。このほか、一般的に利利共生の例として知られるものにアリとアリとイソギンチャク(写真●)、サザンサイ(写真●)、アリとアリとイソギンチャク(写真●)などがある。

広義には物品や動物などを捧げる供物の意味もふくんで、供物の形式には、祈禱に代りたものや初生の供物、奇跡、感謝や交際の供物、贈答や祝賀の供物、霊魂の供進をはかる祝いの供物、死者への供物、人身御供などがある。とりわけ饗宴、饗宴、死者への供物にはおもに家畜が使われ、動物が軍の身がわりとなり、神楽への使者または従者として仕え、あるいは死者の永続の伴役となる役目を負うと考えられた。したがって、ある形態では供養を食すの風習があるが、これは神との共食を象徵すると解される。さらに人身御供やスケープ・ゴートには、呪力の転移をはかり人間の罪を浄化する意図がみられる。犠牲の宗教的研究は、贈り物のタイプ、融合説のW. R. スミス、呪力説のH. ヨーベル、M. モースがおり、デュルケムは奇跡・美食説をとった。

きせいちゅう 寄生虫 他の生物の体内または体表に付着し、その生物から栄養などを得て生活する動物。寄生動物ともいう。寄生をうける生物を宿主といい、宿主の体内に寄生するものを内部寄生虫、体表に寄生するものを外部寄生虫という。内部寄生虫には原生動物、線虫類、条虫類、吸虫類などがあり、外部寄生虫には節足動物が多い。寄生虫のなかには、その発育段階にしたがって異なる宿主の体内で生活するものがある。この場合、一般に幼生が寄生するものを中間宿主、成体が寄生するものを終宿主または終結宿主という。人間の内部寄生虫は内臓結核、血吸、リンパ腺などや家畜物を食べたり、有害な毒素を出したりして人体をおかすことが多い。原生動

物では、市販をおこなう赤痢アメーバ、腹膜炎をおこす瘧トリコモス、力によって媒介されるフナリ原虫などがよく知られる。線虫類には、腸管に寄生する回虫、鉤虫(こうちゅう)、蛔虫(ぎょうちゅう)、リンパ管に寄生するフィラリアなどがある。条虫類は一般にサナダムシと呼ばれる仲間である。吸虫類では、住血吸虫、肝臓ジストマ、結核ジストマ、肝臓(かんてい)などが知られる。寄生虫はその感染経路を断ち切れば防除できる。

きせいときょうせい ①【写真項目】 両ページ。

きせいふく 既服型 すてに商品としてできあがっている衣服。注文によってつくるのではなく、男性用、女性用、子供用にも各種のサイズに応じた既製の型紙を用いる。量産するため工賃が安くなり、布地も節減できることから、比較的に安価に手にはいる。

キー・ウェッター **Raphael Georg Kiesewetter** 1773-1850 オーストリアの音楽学者。アルフレッド・バベルガーの弟子。ウィーンで官吏をつとめながら、古代、中世音楽研究家として大成した。フックスの親友としても有名。著書『古代エジプトと古代ギリシアの音楽』(1838)。

きせき ①【写真項目】

きせき 軌跡 ある与えられた幾何学的条件を満たす空間または平面上の点全体のなす図形。たとえば、平面上

のあい異なる2点A, Bから、等距離の点Cの軌跡は線分ABの垂直二等分線である。また、空間において1点Dから等距離にある点の軌跡は球面である。

きせき 輝石 火成岩、変成岩を構成する主要な造岩鉱物のひとつ。品系の違いにより、斜方輝石と単斜輝石に大別される。マグネシウム、鉄、カルシウムなど多くの元素をふくむ複雑なけい酸塩基物で、火山岩や水山噴出物などに多量存在。主要成分の構成比によって、普通輝石、透輝石、灰鉄輝石、エジリン、エジリン輝石、頑火(がんか)輝石、古銅輝石、紫銅(しそ)輝石など多くの種類が存在する。

きせきけき 奇蹟劇 宗教劇の一種。ミラクルまたはミステル(聖劇)ともいう。中世後半にヨーロッパで流行したキリスト教劇の一種で、聖書の逸話、とくに聖者たちの奇跡物語を題材とするジャン・ボデルの『聖ニコラ』(12世紀末)、リュットプッフの『テオフィルの奇跡』(13世紀)などが知られている。

きせきれい Molacilla cinerea (学) 鳥類セキレイ科の鳥。ヨーロッパ、アジア、北アフリカに分布し、沼澤や河川の近くに住む。全長約20センチ。体の背面は灰色または灰褐色、腹面は黄色で、翅の翼根は灰色の部分で黒色となる。地上を歩くとき尾を上上に振る習性がある。4-8月ごろ岩壁や樹上、ときに人家の屋根などに巣をつくり、4-6個の卵を生む。



1



2

きせき 奇跡 理性ではとらえられない、超自然的力によってひきおこされると信じられている不思議な事象。自然法則による実証は不可能とされ、科学的概念によってもいかなる説明もつかず、もっぱら神学的、宗教的な信仰観念による意味の解釈が与えられる。奇跡を重視する宗教は多く、エジプト教、キリスト教、イスラーム教、仏教、ヒンドゥー教などがあり得るが、とくにキリスト教では奇跡・神学概念の根幹をなす。一般に奇跡は、神がその本質である愛の情懷を示すためにおこなう人間

への神意の啓示と理解され、それによって人間は神の真意をくみとり、信仰上の聖なる規律や神学約理論を構築すべきものと考えられている。キリスト教信仰では、『聖書』に示されているように、旧約時代はモーゼのエジプト脱出のときに、イスラエル民族を導いたモーゼの奇跡をはじめとする奇跡の歴史であり、その主事者はつねに神に帰せられる。また新約では『神の遣わされた生ける奇跡』であるキリストが、最初の奇跡『水の酒』をはじめ、神性の証として奇跡の主事者たることを示し

た。カトリック教会では、さらに聖職概念とかわりが深く、現在でも礼拝聖者の別聖者において、聖者にあらわれた神の奇跡を重視し、その神学的な立証をもとに何聖を決定している。トマス・アクィナス以後のカトリック神学では、神の直接原因によってひきおこされる奇跡はいさかも自然の秩序をそのなかにとけこみ、現代の奇跡信仰批判はスピノザ以後の科学的合理主義によって開始された。写真●『聖ペテロの奇跡』ボッティチエリ画。●『聖ヒエロニムスの奇跡』ダゲルディ画。

ギーゼキング Walter Gieseking 1895-1956 ドイツのピアニスト。リオン生まれ。ハーバーの音楽院でライマーに学び、1920年以降、世界各地で演奏活動をおこし、今世紀前半のピアノ界を代表する1人のひとりとうたわれた。超絶的技巧と近代的詩情を融合した演奏スタイルをもち、ドイツ古典、フランス近代音楽得意とした。ライマーとの共奏『現代ピアノ奏法』(3)がある。

きせつ ————【写真真面目】

きせつ 気候 外界からの身体的または心因的な原因によって一時的に気を失う状態。失神という。一般に発作的に顔面蒼白となって倒れ、意識障害があらわれ、自律神経症状をともなう。一定時間後に回復することが多いが、ときには重症に陥りしものもある。原因には極度の身体的疲労、強度の痛みや驚き、外界空気の悪条件、体位の変化、循環系の異常などがあげられる。その症状や発生のメカニズムは様々なものではない。

きせつふう 季節風 ある地域で、毎年季節のたびに方向を変えて吹く比較的大規模な風。モンスーンという。モンスーン語の源流は、アラビア語の季節を意味するマウシムである。インド洋沿岸地域はもっとも季節風の顕著な地域で、紀元前から外洋航路に利用されてきた。また、東南アジアの太平洋沿岸地域も季節風が明らかにみられる地域である。季節風の成因は、海洋と大陸、北半球と南半球、赤道と極のあいだの温度差の季節変化による。

キセノン xenon (英) 記号Xe, 原子番号54, 原子量131.30, 周期表第6族の希ガス元素。1898年、イギリスの化学者フーズーとトランプアス、液体空気の変質によってはじめて検出した。融点マイナス111.8度、沸点マイナス107.1度。無色無臭の気体で、大気中に0.00009パーセントふくまれる。化合物では四ふつ化キセノンがよく知られている。

ギーゼブレヒト Wilhelm von Giesebrecht 1814-89 ドイツの歴史家。ベルリン大学でフランクの門下となり、卒業後、ギムナジウムの教師を経てケーニヒスベルク大学教授、1862年からはミュンヘン大学教授をつとめた。中世史の収集、翻訳とともに、ドイツ歴史家としての政治、社会・経済を記した『ドイツ皇帝時代の歴史』6巻(155-95)は高く評価されている。この著はジーベルとフィッシャーの『皇帝政策論争』の素材となった。

きせるかい(科) Clausulidae (学) 軟体動物腹足類の1科。世界にひろく分布する陸産の巻貝で、殻が細長く、殻口がめがねが、きせるの種(がくくひ)に似ているのでこの名がある。殻はすべて左巻で、褐色系の色をもつ。ふつと落葉の下や木の洞(ほら)などにすみ、植物質を食べる。雌雄同体で、胎生のものが多いが、なかには産卵するものもある。

ギーゼン Giessen ドイツ連邦共和国(西ドイツ)中部、ヘッセン州の都市。人口7万8000(1971)。ライン川支流

ラーン川沿いに、1248年に自治権を得てはじまった都市であり、古くからフランクフルトと北ドイツとを結ぶ交通の中心地として栄え、現在も鉄道が集中している。主産業は金属、機械、ゴム、たばこ製造など。また、市内には、1607年創立のユーストゥス・リービヒ大学、植物園、16世紀に再建された古城などがみられる。

きそ 起訴 刑事訴訟法における「告訴の提起」をさす慣用語で、裁判所に対して審判を求める訴訟行為。日本では、国家訴訟主義をとっているため、国家機関である検察官だけが告訴の権利をもっているが、被害者の配慮として、捜査機関に捜査を求める告訴などが認められている。

ギーゾー François Pierre Guillaume Guizot 1787-1874 フランスの政治家、歴史家。1812年カソルボン大学で近世史の講義をもっていたが、14年に王政復古になると、自由主義の立場からブルボン家の反動政治に反対した。しかし、30年に下院議員となり、七月王政ではルイ・フィリップを支持して、32-37年には文相、40-47年には外相、40-48年には首相の職にあつて、商業ブルジョアを基盤とする政権の安定につとめ、共和勢力をおさへた。全権政治に終結しながら労働運動に理解を示さず、選挙法の改正を否定したため、48年に二月革命をひきおこしてイギリスに亡命。著『ヨーロッパ文明史』(28)、『フランス文明史』5巻(29-38)、『現代史のメモワール』9巻(58-68)。



きせつ 季節 1年を、よく似た気象状態がつづく期間ごとに区分したものを。季節の変化は、地球の自転軸が公転軸に対して23度27分の傾きをもっているため、太陽高度と昼長の長さに変化がおこる。温帯地方では、春、夏、秋、冬の順で四季があり、それぞれ、春分、夏至、秋分、冬至をもって各季節のはじめとする。古代中国では、立春、立夏、立秋、立冬をもって各季節のはじめとしたが、これは、気候による季節感とはちがひしくずれたため、適当な区分ではない。なお、地球の軌道傾斜角

には因でないため、各季節の期間の長さは等しくない。こうして区分した四季は、天文学的季節と呼ばれ、北半球の温帯地方では、冬は太陽が南半球にいたるため、太陽高度が最小で、昼間が短く、太陽からの受熱量も最小となるために寒い。夏は太陽が北半球にいたるため、太陽高度が最高で、昼間が長く、太陽からの受熱量も最大となるために暑い。春分と秋分は昼夜の長さが等しく、ちょうど、冬と夏の中間の気候となる。しかし、極地では夏と冬2季節しかなく、夏には太陽の沈まない

地域がある。冬には太陽の昇らない地域がある。また、赤道地域では四季の区別はあまり明確ではなく、降水量によって雨季と乾季とに分けられる。さらに南半球は、北半球とは正反対の季節になっている。つまり、北半球が春のときに南半球は秋、夏のときには冬である。そのほか、海陸の分布、地形、海流などの影響によって、地球上には多種多様な気候帯が存在し、季節のあり方も一定ではない。写真は、ブランドルの画家ブリュールの描いた春、●秋、●冬、●夏。